

イヨネスコ戯曲全集 2 (全4巻)

定価 九五〇円

一九六九年八月一〇日印刷
一九六九年八月二〇日発行

訳者 ©

大久保輝臣
篠沢秀夫
加藤新吉

発行者 草野貞之

印刷者 田中昭三

発行所 株式会社白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(29)七八一一代
振替東京三三二二八
郵便番号一〇一

理想社印刷・松岳社製本

イヨネスコ戯曲全集

2

Titre : ŒUVRE THÉÂTRALE IONESCO, tome 2

Amédée ou Comment s'en débarrasser

(THÉÂTRE I, © 1954)

Le nouveau locataire (THÉÂTRE II, © 1958)

Le tableau (THÉÂTRE III, 1963)

Rhinocéros (THÉÂTRE III, © 1963)

Auteur : Eugène IONESCO

© Éditions Gallimard.

Copyright in Japan by Librairie Hakusuisha.

イヨネスコ戯曲全集

2
ONE

アメデ、あなたはどうかやって私いますか
新しい下宿人

MÉDÉE C

白水社

E NO LIVRE

此为试读,需要完整PDF请访问: www.fertongbook.com

目次

アメデ、あるいは	7
どうやって厄介払うのか	109
新しい下宿人	139
絵	183
犀	285
解説（加藤新吉）	

大久保 輝臣 訳

アメデ、あるいは
どうやって厄介払いするか

——三幕喜劇——

AMÉDÉE OU COMMENT S'EN DÉBARRASSER

—— Comédie en trois actes ——

Éditions Gallimard, 1954.

人物

アメデ・ブッチニオーニ 四十五歳

マドレーヌ その妻、四十五歳

(アメデⅡ)

(マドレーヌⅡ)

郵便配達人

第一のアメリカ兵

(第二のアメリカ兵)

マド 若い女

(バーの主人)

第一の警官

第二の警官

窓ぎわの男

窓ぎわの女

装置

質素な食堂兼居間兼書斎。

下手にドアが一つ。

上手にもう一つのドア。

舞台奥、中央に大きな窓が一つ。鏝戸よろいどはしまっている

が、その広いすき間から、たっぷり光が差し込んでいる。上手寄りの部分、舞台の中ほどに、数冊のノート

と数本の鉛筆をのせた小さなテーブル。

下手寄りの部分には、窓と下手のドアとの間の壁に面

して、電話の内線交換機をのせた小さなテーブルと椅子

が一脚。中ほどのテーブルのそばにも、同じく椅子

が一脚。舞台前面に、古びた肘掛け椅子ひじかが一脚。針の

動きがはっきりとわかる掛け時計が一つ。第一幕にお

いては、それ以外に家具があつてはならない。

第一幕

幕があがると、アメデ・ブッチニオーニが歩き回っている。中年のプチブル、なるべくなら禿頭であること。わずかに白いものが混じりはじめたちょびひげ。めがねをかけ、地味な色の上着、グレイの縞のはいった黒いズボン、先のすり切れたカラー、黒いネクタイ。頭をたれ、両手を背後に組み、いらいらと考え込みながら、家具のまわりを回って歩く。ときおり、中央のテーブルに近寄ると、ノートをあけ、鉛筆を手にとって書こうとするが（彼は戯曲を書いているのだ）、どうしても書けない。さもなければたった一語書きつけるだけで、すぐにそれを消してしまう。見るからに落ち着きのない様子。ときおり、半開きになった上手のドアのほうにちらりと目を投げる。その不安、焦燥はますます深まってくる。床を見つめながら、部屋の中を歩き回っているが、だしぬけに身がかめると、椅子の背後からなにかを引っかく。

アメデ　きのこだ！　ちくしょう！　そうか、いよいよ食堂にまで生えてきやがったら、もうおしまいだぞ！（からだを起こして、しげしげとときのこを見つめる）これですっかりそろったってわけか、お膳立ては！……きまつてるさ……毒きのこに！（ますます落ち着かなそうに、また歩き続ける。片隅のテーブルの上にきのこのせ、不愉快そうにそれを見てから、身ぶりよろしく自分に向かつてつぶやく。ますます頻繁に上手のドアに目をやると、一言書きつけにいて、すぐにそれを消す。やがて、ぐったりと脇掛け椅子にくずおれる）まったく、あのマドレーヌときたら、いったん寝室にはいり込むと、それっきり出てきやしない！（ぶつぶつこぼす）あいつの姿はもうたつぷりとながめたくせに。二人とも、もううんざりするほどながめたんだ、あいつの姿は！　あーあ、やれやれだ、ほんとに！

それから、げんなりとして口をつぐむ。休止。下手のほう、踊り場のあたりで人声がする。おそらく管理人のおかみの声だろう、続いて隣人の声が聞こえる。

管理人のおかみの声 おや、ヴィクトールさん、夏休みからお帰りで！

隣人の声 そうなんですよ、クークー夫人。北極へ行ってきました。

管理人のおかみの声 へえ、じゃ寒かったでしょう！

隣人の声 いやまあ、天気がよかったしね。もっとも、あんたみたいに南仏生まれの人にとっちゃ……

管理人のおかみの声 南仏生まれじゃありませんよ、あたしは。あたしのお祖母さんのかかってた産科医がツローンの人でしたけど、お祖母さんはずっとリールに住んでましたし……

《リール》という言葉聞いたとたん、突然アメデはもうがまんがでなくなり、立ち上がって上手のドアのほうへ近寄る。ドアを広くあけて、呼ぶ。

アメデ マドレーヌ、おい、マドレーヌ、なにをしているんだ、いつまでもきりがないぞ、さっさとおいでよ！
マドレーヌ（現われる。年齢のころは夫と同じ、背たけも同じくらいか、ほんの少し高い。冷酷で、気むずかし

そうな女。頭に古いショールをかぶり、家事をするときの部屋着をきている。どちらかといえばやせぎすで、陰気くさい。妻が現われると、夫はさっとわきへ寄って、彼女を通してやる。彼女はドアを半開きにしたまま）どうしたのよ、また！ あんたときたら、ほんのちょっとでも一人っきりでいられないんだねえ！ あたしだって、なにも遊んでたわけじゃないんだよ！

アメデ とにかく、あいつの部屋にこもりつきりしていることはいらないだろう。どうせろくなことはありやしない！……もうたつぷりとながめたんだ。これ以上は必要ないよ。

マドレーヌ きれいに掃除をしとかなきゃなんなかったんだよ。どっちみち、だれかが家事をやらなくちゃならない。この家には女中がいらないだし、だれもあたしを手伝っちゃくれない。おまけに、稼ぐのもこのあたしときてるんだから。

アメデ わかってるよ、女中がいなくてことくらい。一日に百べんも繰り返して聞かされりや……

マドレーヌ（部屋の中を掃いたりふいたりしはじめ）
そうなんだ、あんたといると、ろくすっぽ不平を言う権利もありやしない……

アメデ おいしい、マドレーヌ、嫌味はよせよ……

マドレーヌ そうですとも、せいぜい悪口でもおっしゃいよ！

アメデ だけどさ、おまえこそよく知ってるくせに、おまえに同情しているのは、まずだいいちにこのおれなんだし、そもそもこのおれしかないじゃないか。おれだって、こんな状態はやりきれないし、困ったものだと思っている。しかし……それにしても……ほら、たとえばだぜ、これくらいの広さの部屋と、もっと狭いあいつの部屋を掃除するなら、せいぜい十五分もありゃいいはずなのに、おまえときたら、一時間はおろか二時間あったって足りやしないんだ……あっちの部屋でぐずぐずしちゃ、あいつの顔をしげしげとながめている……

マドレーヌ へえ、あんたときたら、あたしのすることをしておりませう、どうやって暮らしております、それをいちいちだんなさまにお知らせしなければ気がすまない。あたしはもう自分自身のものじゃない、あたしはもう自分自身じゃなくて、奴隷なんだ……

アメデ 奴隷制はとうに廃止されちまつたよ、ぼくのかわいい奥さん……

マドレーヌ あたしはあんたの《かわいい奥さん》なんかじゃありませんよ！

アメデ ……奴隷なんてものはもういやしない……

マドレーヌ それじゃ、つまり現代ふうの奴隷なんですよ！

アメデ おまえはおれの言うことを理解しようとしてくれない。おれはおまえに同情すればこそ……

マドレーヌ どうしようもあるもんですか、あんたなんかにくら同情されたって。ばかばかしい、このうそつき、偽善者！

アメデ でもさ、つまり、おまえに同情すればこそ、あそこにくずくずして……どうも失礼……あそこにじっとして、あいつをながめてなんかいてもらいたくないんだ。どうせろくなことにはならないし、なんの役にもたちやしない……

マドレーヌ（無関心に）さっさとあのドアをしめておいでよ。なにをぐずぐずしているのさ！ すーすー風が通るじゃないか……

アメデ ほかのドアや窓は全部しめきつてあるよ。風なんか通るはずがないだろう？

アメデは上手のドアをしめにいく。だがしめる前に、その背後にあると思われる部屋の中をちらりと覗き込む。アメデを見張っているマドレーヌは、それに気がつく。

マドレーヌ ほらほら、なにをしているのよ？ あんたこそ、どうしてあいつをながめたりするのさ？……人にはぶつくさ文句を言うくせに……さあ、ドアをしめるんだってば。

アメデ（やっとドアをしめてから、マドレーヌのほうへ戻ってくる）たしかめたかったのさ、またのびたかどうか……どうやら、また少し大きくなったみたいだぜ。

マドレーヌ（そっけなく）大きくなんかなってないわよ、きのうから……少なくとも、目だつほどには！

アメデ これでもうおしまいかな。たぶん、この程度で止まるんだらうよ。

マドレーヌ あーあ、ばかばかしいにもほどがあるわ、あなたの《楽天主義》ときたら。その見通しのおかげでいつもどんなはめになったか、知る人ぞ知るだわ。芝居でも書いてるほうがまだましよ。（せっせとふき掃除をしながら、ちらりとテーブルの上を見る）どうやらはか

どった形跡もないわね。相変わらず第一景で足踏みをしたまま。絶対に書き終えられっこのあるもんですか！

アメデ 書き終えられるさ……とにかく、せりふを一個所、ふやしたからな。（彼はノートを開く。マドレーヌは仕事をやめ、手にほうきかぼろ切れを持って、耳をすます。アメデは読む）老人が老婆に言う、《これだけではうまくいかんさ！》

マドレーヌ それっきり？

アメデ（ノートを置く）どうにもインスピレーションがわいてこない。こういろんなことが気にかかっちゃ……今のこの暮らしだとか……まるで雰囲気になってない……

マドレーヌ 言いわけだけは事欠かないんだからね……

アメデ どうにも疲れた、疲れたよ。ぐったりして、だるいし、こなれが悪くて、胃にもたれるし、しょっちゅう眠けがする。

マドレーヌ 一日じゅう、うたた寝をしてるくせに！

アメデ だからそのせいなんだ。

マドレーヌ あたしだって疲れているし、くたくたなんだよ。けれども働いてるんだ、働きづめに、働いている……アメデ 疲れ果てたよ、どうにもならない。きっと肝臓の

せいだな。自分でもすっかり老け込んだ気がする。この年齢^{とし}じゃとても若いなんてもんじゃない、それはそうだが、しかしまだいくらなんでも……

マドレーヌ　なら休めばいいでしょ。だれが休むじゃまをするもんですか！ 夜はぐっすり眠って、昼間はもう眠らないことにするのよ。食べる量をもっと減らして。食べすぎたからこそこんなざまになったんだわ。飲むほうも度がすぎたし。

アメデ　おれが酔いつぶれたところなんか、見たこともないくせに。

マドレーヌ　ないどころか！……

アメデ　うそをつけ。

マドレーヌ　べつに酔っぱらわなかったって、アル中にはなるわよ！……食前に軽く一杯ひっかけ……あれがいけないんだよ。いくら軽い酒だって、飲みつけたら、からだをこわすにきまつてるさ！……

アメデ　でもおれは、トマトジュースしか飲んだことがない……

マドレーヌ　それならばよ、いつもそれほど節制してたんだったら、働きなさいよ。たいしたことはなんにもなくて、五体健全なんだたら、さっさと働きなさい、どし

どし傑作をお書きなさいってば！……

アメデ　わかないんだよ、インスピレーションが……

マドレーヌ　またしても例のきまり文句だ！　じゃ、いったいどうやってるんだろうねえ、ほかの人たちは？　あなたには十五年も前から、もうインスピレーションがわかなかつたんだ！

アメデ　十五年か、そのとおりだよ！（上手のドアを指さす）あいつがあそこに来て以来、書けたせりふは二つきりだ……（彼はノートを手にとって、読む）老人に向かって老婆が言うせりふ、《あんた、これでうまくいかしら？》ってのと、もう一つはきょう書いて、さっき読んで聞かせた老人の返事、《これだけではうまくいかんさ》っていうのと、この二つのせりふだけだ。（自分のテーブルに向かって腰をおろす）さあ、とにかく仕事にかからなきゃ、仕事に。こんな状態でも、なおかつ書くのか。創作ということは喜んでしなければいけない。おれみたいな境遇で、こんなみじめなありさまで書けるというのは、よっぽどの英雄か、超人ででもなければだめなんだ……

マドレーヌ　見たことあるの、みじめなありさまの超人なんて？　それこそあんだだけくらいなものだろうよ！

アメデ とにかく仕事にかからなきゃ。ほんとにつらいけど。仕事をしなくちゃいけないんだ！……

テーブルに向かって、ぐったりとしている。両脇について、両手に頭を埋め、途方にくれ、やつれ果てた目つき。やがて、額をささえる両腕といっしょに、頭がゆっくりと前に傾く。無言の場面。この間に、マドレーヌは掃き掃除を終えてしまう。夫のそんな格好を見て、彼女は肩をすぼめ、口の中でつぶやく。

マドレーヌ（傍白） どうしようもないなまけ者だよ！

彼女は前掛けをはずし、ショールを取る。それらのものとはうきやばろ切れなどを持って、上手のドアのほうへ行く。ドアに近づいて半分あけかけると、とたんにアメデがさっと顔をあげる。

アメデ また行くのか、あいつの部屋に！……

マドレーヌ（腕にかかえたものを指さしながら）だって、こんなものをいつまでもかかえてるわけにいかないで

しょ！ いったいどこに置けばいいっていうの？ 食堂になんか置いとけやしない！ 部屋数がざらにあるわけじゃないんだよ！

アメデ それはそうだが、あんまり長居するなよ。

マドレーヌ どっちみち、長居なんかできっこないじゃないか。すぐに働かなきゃならない、食うために……食うためにだよ！

彼女は上手の部屋にはいる。アメデは心配そうに、それを目で追いながら、ためらっている。やがて立ち上がると、半開きになった上手のドアのほうへ、用心しいしい近寄る。やりきれないといった身ぶり、すぐにテーブルのほうへ戻ろうとしかけるが、まにあわない。引き返してきたマドレーヌとぶつかってしまう。

マドレーヌ 気をつけてよ！ 痛いじゃないか！

アメデ ごめんよ、わざとしたんじゃない！……

マドレーヌ いくらなんでもあんまりだ！……こっそり見張っているなんて！

アメデ 相愛わらず大きくなっているのかい、あいつ？